

# 政治

ライフ・ストーリー III

太田昭宏氏へのインタビューをもとに、その人生の記録を編集部で書き起こしました

## 政治

太田は、大きな志を抱いて  
京都から上京した。

政治や経済を洞察する力を養つた  
公明新聞の国会記者時代。

政界の表舞台で  
実力を發揮するまでには、  
陰の苦労や試練を  
くぐり抜けなければならなかつた。

## 印刷工場からのスタート

昭和四十六年、公明新聞の面接試験会場に、一風変わった若者が現れた。

借りてきた猫のようにかしこまつた入社志願者が多い中で、面接官に対し「私は入社後、政策の仕事をしたいと思います」。自信満々である。さらに「中道政治とは何でしょうか」と質問までしてきた。京都から上京してきた太田である。

面接官も黙っていない。「きみは、雑巾（ぞうきん）がけができるか！」。鼻つ柱の強い太田との間に火花が散った。さらに、たたみかけるように「うちはエリートはいらない。いい意味で、くせのある人間が欲しいんだ」。太田の東京における波乱万丈の日々が始まった。

太田の最初の職場は、国会の記者席でもなければ、公明党本部内の編集フロアでもなかつた。東京の浜松町駅から徒歩七、八分、深夜まで人の出入りが絶えない印刷工場だつた。公明新聞の整理・校

閲（こうえつ）部門が入っている東日工場である。ここで太田は一年半の間、校閲と整理の仕事にたずさわった。

校閲記者は、目をさらのようにして、ゲラ刷りの中から活字のミスを発見し、赤字で訂正していく。

整理記者は、倍数尺と呼ばれる独特の定規をあやつりながら、記事と見出しどと写真を読みやすくレイアウトする。

どちらも地味な裏方の仕事だが、新聞製作における重要部門であり、ここで訓練を受けてから取材記者として、第一線に飛び出していくケースが多い。

太田は朝、工場に出勤すると、まずエンジ色の作業着に着替えた。背広やワイシャツのままだと、たちまち活字のインクで台なしになってしまう。足下はサンダルばきの軽装。

今ではコンピューターによる紙面製作だが、当時は鉛でできた活字を組んでいた。実際に紙面を組む段階では、東日工場の従業員と共同作業になる。こちらの指示どおり、ピンセットで器用に活字をつまみ、誤字や字詰めを直してくれる。

東日工場時代



京大出の太田も、彼らの前では「坊や」扱いである。職人気質で少しうつきらぼうだが、つきあってみれば仕事は正確・迅速で頼もしい存在だった。順応性の高い太田は、たちまち工場の職人さんとも仲よくなり、かわいがつてもらつた。

降版時間の直前は要注意である。「太田君、一面、直しだ！」と、デスクの声が飛ぶと、工場内の階段を疾走することも、日常茶飯の光景である。

住まいは、東京の目白にあつた公明の独身寮。六畳一間に三人暮らしがある。京都の下宿の方が、まだ住みやすかつた。住宅政策の公明党だが、身内には厳しいな、と太田は感じた。

独身寮に帰つても、同居の仲間への遠慮もあり、なかなか勉強に打ち込めない。太田は、目白駅前の喫茶店「ルノアール」を根城にした。一番奥まつたテーブルを指定席のようにして、時間があれば本を読みふけつた。

夏の休日もクーラーの効いた「ルノアール」で缶詰になつて勉強。

体が冷えすぎると、目白駅から山手線に乗った。まだ冷房車が普及していなかつたので、本を読みながら山手線を一周すると体が温まり、また「ルノアール」へ。

ちよくちよく来店する太田に気をつかって、店側が太田の「指定席」の上の照明を明るいものに替えてくれた。こうして東日工場時代も地道に研さんを続け、記者として敏腕をふるう日にそなえた。

## 福祉を研究した新米記者

師走の北風が銀座通りを吹き抜け、コートの襟（えり）やマフラーに顔をうずめるようにして会社員や買い物客が道を急いでいた。

昭和四十七年十一月。東京の有楽町駅前。

「公明新聞をお読みください！」

メガホンを手にした太田が少しダミ声だが、よく通る声で呼びかけ、新聞を配っていた。手に取ってくれる人もいれば、あからさま

に好奇の視線を注ぐ人もいた。「がんばってください」とねぎらいの声をかけられると、無性に胸が温かくなつた。太田は、東日工場から配属がかわり、機関紙局の政治部記者になつたばかりだつた。

この年の十二月十日に行われた第三十三回衆議院選挙は公明党にとって、厳しい結果に終わつてしまつた。四十七議席から二十九議席に転落し、野党第三党に甘んじることになつた。

しかし失意に沈んでいる暇はない。「今こそ街に出よう!」「有権者に直接、訴えようじゃないか」。公明の若手記者が中心となつて街頭に立ち、公明党の政策を主張することにしたのである。党勢回復へ、戦いの火ぶたは切られた。

政治記者として働き始めた太田だが、その眼前には、日本の不毛な政治風土が広がつていた。

昭和四十七年七月に田中政権がスタート。その庶民性や行動力から当初の人気は高かつたが、石油危機を引き金に、インフレと不況、狂乱物価に生活を打撃された国民の心は離れ、金脈問題発覚後の昭

に立つ

昭和四十七年十二月、街頭



和四十九年十一月に田中総理は退陣を余儀なくされた。

戦後の高度経済成長に、はじめて赤信号がともり、次の三木内閣時代にはロッキード事件の衝撃が走った。これ以降、「政治と金」をめぐるスキャンダルが後を絶たず、国民の政治離れも加速していく転換期でもあつた。

国会審議も大荒れで、暴走する場面もしばしばあつた。

たとえば太田が国会に詰めていた昭和四十八年は、防衛二法案、国鉄、筑波大学法案、健保などが争点だつた。七月十七日、参院自民党は内閣委、運輸委、文教委で、ほぼ同時に審議を打ち切り、强行採決にふみきつた。太田の目の前で与野党の議員がつかみ合い、怒号が飛びかつた。

まともな政策論争などない。審議が紛糾（ふんきゅう）すると、のちに首相となる大物政治家が野党の部屋にきて「頼むよ。俺とあなたの仲じやないか」と与野党の妥協を求めて泣きついてくる姿も見た。

予算委員会も白熱し、記者席でゆつたり原稿を書いている場合で



政治部記者時代

はなかつた。原稿用紙に鉛筆をたたきつけるように記事を書き飛ばし、「後は頼む」と後ろの同僚に原稿を放り投げ、次の取材場所に走つていくような毎日だつた。

犠牲になつたのは、国民の生活である。政府は物価高や不況に効果的な手を打つことができず、促成栽培された戦後政治のひ弱さが浮き彫りになつた。

特に昭和四十八年は「福祉元年」とも呼ばれ、政府の方針では、従来の高度成長一本やりから福祉の充実に転換する年とされていた。しかし、折からの物価高が福祉充実をすすめようとする公共部門の活動を圧迫した。社会福祉事業などの経営も苦しくなり、福祉充実への支出増大が物価上昇に食われ、まったく効果があがらなかつた。

「今こそ庶民のために福祉を守らなければならぬ」——。国民不在の論戦を目の当たりにしてきた太田は、福祉政策を徹底的に学んだ。

当時、与党は健保値上げ法案を提出してきたため、公明党は強力な論戦を繰り広げた。その中心となつて、公明の議員とともに福祉を研究し、政策実現に努力したのが太田だった。

また年金問題でも、生活しやすい年金の額として、月に六万円が給付されるように公明党は政府に迫つたが、ここでも太田は庶民の側に立つてペンをふるつた。

のちに福祉政策は、「福祉の公明」と呼ばれるほど、公明党の看板になつていく。太田は、そのさきがけとして働いたのである。

## 共産党に堂々の論戦

ある日、公明新聞の編集局に、一本の電話がかかってきた。受話器の向こう側の人物は、丁寧な口調でNHKの報道関係者であることを名乗つた。

「実は、公明新聞に載つていたジャンケンポン論を番組で使わせ

てもらいたいのですが……」。NHK解説委員からの申し入れだった。解説委員の目にとまつた記事は太田が執筆したもので、日本の政治状況を分かりやすくジャンケンにたとえた内容だった。

日本の政治はそれまで、なれ合い的な五五年体制がもたらす、勝負の決まつたジャンケンだった。つまり自民党がパーを出せば、石のように固い野党はグーを出し、形の上ではジャンケンという論戦をしているようだが、一方的な自民ペースであり、政治はまったく動いていなかつた。

その閉そく感を破るためにには、チョキを出す政党が必要であり、中道の公明党がこの役割を担つた。

チョキを出す公明党が現れたことで、政治は回転を始めた。チョキはパーに勝ち、パーはグーに勝ち、グーはチョキに勝つ。この競争原理が働くことで政治が活性化するのである。このように、中道政党的公明党の立場を太田は記事のなかで説明したのである。

太田は造語、キャッチフレーズづくりの名人で、若いころから難解な問題をやさしく印象的な言葉で表現してきた。学生時代から人

一倍の読書を重ねてきた太田の資質が、記者となつた今、開花しようとしていた。

また昭和四十八年、公明党の支持者が憤慨（ふんがい）している問題があつた。

それは共産党による悪質な反公明キャンペーンが、エスカレートしていることだつた。公明新聞や議員、党員が抗議しても、共産党側は肝心な場面になると、巧みに論点をすりかえ、まったく反省の色はうかがえなかつた。青年らしい正義感や批判力が旺盛だつた太田も、まじめな支持者を傷つける共産党が人一倍、許せなかつた。

公明党の機関紙局で、あるプロジェクトが発足したのはそのころだつた。共産党に対し、公開質問状の形で本格的な論戦を挑むことになつたのである。

テーマは枝葉末節の問題ではなく、ずばり憲法三原理（国民主権、平和主義、基本的人権）という国政の根本原理から考察した形で、日本共産党の欺瞞（ぎまん）や矛盾を問い合わせ質問状を作成することになつた。

執筆チームの人選が始まった。シャープな切れ味があつて、しかも論理の構築が緻密（ちみつ）でなくてはならない。ある幹部が口を開いた。「太田はどうだ。まだ若いが、試してみよう」。若手からの抜きである。

この公開質問状は、公明新聞などで発表され、のちに『憲法三原理をめぐる日本共産党批判』として集大成された。すべての原稿を合わせると、四百字詰め原稿用紙で五百六十枚（約二十二万字）にもおよぶ大論文である。

太田の担当は、プロレタリア独裁の体質をただす箇所である。デマをまき散らす共産党に鉄槌（てつつい）を下したかった太田は、全力を注いでペンを走らせた。

共産党には、憲法擁護を主張しながら、人民の憲法に変えることをうたつた欺瞞がある。そして独裁に必ず帰着してしまうという致命的な矛盾を太田は筆鋒（ひつぽう）鋭くついた。

この公開質問状は外部の識者からも高く評価された。しかし、公明党が共産党の綱領や重要文献、その歴史的事実に基づいて行つた

質問にもかかわらず、当の共産党からは相変わらず一方的な中傷によつて、論争を回避、放棄する姿勢しか見られなかつた。

## 青年運動のリーダーに

六年間の記者生活の後、太田に再び転機が訪れた。公明党を離れ、創価学会青年部のリーダーとして働くことになつたのである。

男子部長、青年部長等を歴任し、青年を勇気づけ、青年の声を社会に発信していく企画力、実行力には定評があつた。青年主張大会、青年友好大会、反戦運動、文化祭運動など、どれも無名の青年が主役だつた。

どの時代も同じかも知れないが、先行する世代は、青年層に対しても「今どきの若者は……」と嘆くことが多い。

若者気質を表す「三無主義（無気力、無関心、無責任）」という言葉が使われたことがある。無感動、無作法を加えた、「五無主義」も



八〇年代、創価青年運動の先頭を走る

流行した。あげくの果てには「十三無主義」なる言葉まで生まれ、昭和五十年代も若者は否定的に見られがちだった。

しかし太田の青年の見方には否定的な陰りはなかつた。実に肯定的で「どの人間にも素晴らしい可能性がある」と信じていた。社会に言葉や行動を届けていくための「場」をセッティングできれば、青年のエネルギーは、社会に意義ある運動を展開することができる。それを証明することができた青年部時代でもあつた。

また創価学会の池田大作名誉会長から学んだものはあまりにも多かった。その中で、この項に一つだけ記すならば、それは「実際に人に会うこと」の意味の重さである。

東西の冷戦期に米中ソの三国首脳と対談し、民間外交を展開したように池田大作名誉会長の平和行動は、まず会うことから始まる。

「人は会つてみなければ分からぬ」といわれるが、これは実に平易でありながら、人間世界の急所をついた言葉である。なぜなら、実際には会いもしないで、言葉も交わさないで、相手のことを見入

青年部長時代



観や好悪を基準に判断していることが、現実社会ではあまりにも多い。

「人に会うこと」「人と語ること」。これが昭和六十三年に公明党に戻り、政治の世界に挑戦していく太田の行動の原点になつていつた。

## 落選そして再起

太田の人生で忘れられない黒星がついたのは、平成二年二月の第三十九回衆議院選挙だつた。激戦区の東京八区から出馬したが、涙をのんだ。これまで学生時代、社会人時代を含め、はた目から見ると、白星街道をばく進してきた男に初めて土がついた。

太田は、その政治家としての資質から「公明のプリンス」と噂され、当選すれば、やがて「次の党にならう器」と目されていた。しかし現実の選挙は厳しかつた。下町の路地裏や商店街を、ひざがボ



衆議院議員初当選  
(平成五年)

口、ボロになつて動けなくなるまで回つたが、勝てなかつた。

落選直後のことである。台東区内を支援の御礼に歩いていると、道ばたで目をはらしていた婦人の支援者が、太田の顔を見るなり顔をゆがめ、下を向いて泣き出してしまつた。

ああ、いつたい俺は、この婦人の悲しみや心労に対しても何ができるのだろうか——。一票の重さ。支援の真心。自分の力不足。これらを、このときほど感じたことはない。

もともと厳しい選挙区だつたが、負けは負けである。しかし逆にいえば「落選」ほど、人間を大きくするものはない。倒産から再起した実業家が経済を知り、大病を克服した人が生命の重さを実感するように、倒れてみなければつかめないものもある。

次の平成五年七月の総選挙で議員バッジをつけるまで、最初の選挙の準備期間と合わせ、計五年を要した。浪人時代は、政策を勉強するときも、人に会うときも、資料集めも、すべてひとりの力でやらなければならなかつた。

太田に人間的な奥行きが生まれてきたのは、このころではなかつ

平成五年八月五日、初登院  
(公明新聞提供)

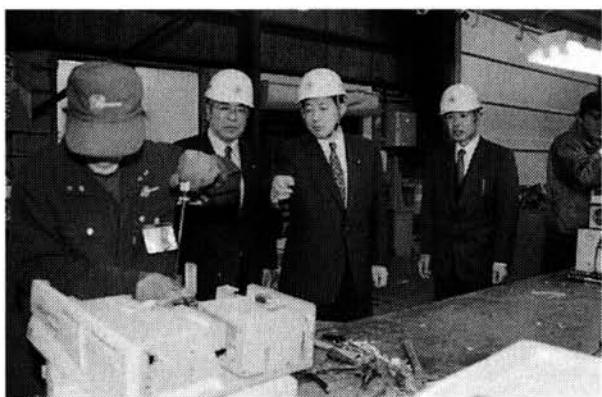


ただろうか。もしストレートで当選していたら、どこか心の奥におごりが巣くつたままだったかも知れない。

太田が初当選した衆院選の直後に、政界地図はかつてないほど一変した。いわゆる五五年体制が崩壊し、細川連立内閣が発足した。公明党も連立の一翼を担うことになった。

与党には、政策遂行の責任と能力がなければならない。太田はフル回転で動き始めた。一年生議員ながら、多くの肩書きもついた。連立内閣の中で、政策研究会や各種会合にこまめに顔を出し、やがて他党的政治家から「あの男はだれだ」と注目されるようになつた。

その後、公明党が野党に転じることもあつたが、いずれにせよ自民党的の単独政権ではなく、政界は連立の時代に入つた。旧思考にとらわれず、国家のグランドデザインを描くことのできる、太田のような理念ある政治家の出番がきた――。



中小零細企業を守るために

## 中小企業の力になりたい

平成十年。日本の金融界は危険な状態に追い込まれていた。自主廃業を決めていた国内四位の山一証券が、三月に全社員を解雇し、百一年にわたる歴史に幕を閉じた。

また二月には、二十年来の親友だった三人の社長が、経営難のあげくに別れの杯をかわしたあとで、ホテルのそれぞれの部屋で首をくくる心中事件もあつた。三人のうち二人は、従業員が数十人規模の会社社長だつた。

四大証券の一角から中小零細企業に至るまで、日本経済にあまりにも闇は深かつた。ひとつ引き金が引かれれば、金融恐慌が起こりかねない瀬戸際にあつたのである。

こうして迎えた秋の国会は「金融国会」と呼ばれた。当時は野党だった公明党だが、日本のかつてない難局を乗り切るために、小渕内閣の金融政策に協力する姿勢を打ち出した。折から衆議院商工委員会の理事だつた太田の双肩に、重い責任がのしかかっていた。処方箋は

急がなければならぬ。しかし一步あやまれば、患者である金融界はパニック状態になる恐れもある。もつとも弱り、苦しんでいる患部はどこなのかなー。

商工委員会でも議論は百出したが、太田は中小企業のバックアップに全力を入れるべきであると主張した。明日の会社の運転資金がないのである。

経営者が銀行に融資を申し入れても「残念ながら、融資額に見合う担保がございませんので……」と断られた。いわゆる貸し渋りである。バブル期にあれほど満面の笑みで歓待してくれた融資担当者が別人のように冷淡になつた。

この年は自殺者がはじめて三万人を超えた年だつた。一日に九十人の人が自ら死を選んだのである。「負債」や「事業不振」などによる中高年の自殺が急増していた。

「うちの父ちゃんを殺したのは、いったいだれだ！」

残された遺族は、やり場のない悲しみと怒りにふるえた。

すべての重荷を経営者ひとりが背負わなければならぬ中小零細

企業には、そこまで自分をさいなんてしまう、まじめで責任感の強い人が多いことを太田は知っていた。その人たちの力にならなければ、何のための政治だろうか。大企業や銀行を守ることだけが政治ではない。

こう考えた太田は、中小企業への信用保証協会の特別保証制度を成立させる推進役となつた。これによつて、無担保で五千万円までの融資が可能になつた。どれだけの中小企業が救われたことだろうか。

白昼からシャツジャーを下ろしていた下町の工場街にも、少しずつ部品を製造する音が聞こえるようになつた。

## 民衆のための政治を

太田昭宏は、民衆の中から生まれ、民衆に育てられた政治家である。



戦争に苦しめられた母から平和の尊さを学んだ。長男を亡くしてすぐに夫が出征した日の悲しみはいつまでも消えなかつたという。太田は、思想的な戦前への回帰を断じて許すことはできない。

また太田には、幼くして命を落とし、あいまみえたこともない、血を分けた四人の兄弟がいる。人の二倍、三倍努力してきた太田は、まさに亡くなつた兄弟の分まで力の限り生きてきた。

そして行商のリヤカーを引いて働いた父の背中は、中小企業をはじめ、庶民の暮らしを守る太田の原点になつてゐる。

すべての母の幸福のため。平和のため。生命のため。民衆のため。どれも人間主義の政治を実現しようとする太田にとつてのキーワードであり、行動の起点となつてゐる。

太田は現在、夫人と二男一女の五人家族。

父の鏡平は、すでに昭和五十四年に他界したが、母の春子は九十一歳の今も、郷里・豊橋で健在である。太田が夏みかん並木をつづた、あの青陵街道のそばで暮らしている。

きっと並木道に黄色い夏みかんが実るたびに、息子を思い出し、  
幸せな笑顔を浮かべているにちがいない——。

---